

# 鯰絵の世界

はじめに

安政2年（1855年）10月2日の夜、江戸安政地震が発生した。地震直後から、「地震は、鹿島大明神の要石に抑えられている地下の大ナマズが暴れて起こす」という俗説に基づいた『鯰絵』が多数出版され、爆発的なブームとなる。現在、鯰絵は二百数十点が確認されているが、図像としては、安政地震を起こした地震鯰を鹿島大明神が叱責しているもの、地震で被害を受けた人々が地震鯰を打擲しているものが目に付く。一方それらとは逆に、大工・左官などの職人や雑多な職業の人々が、地震鯰を歓待している図像のものも多く知られている。この様な、「鯰絵の世界」とも呼ぶべき図像の多様さは、一体何を表しているのだろうか。

## 地震鯰が「悪者」の鯰絵

江戸安政地震の余震は昼夜を問わず約一ヵ月間続き、家財を失った被災者たちは不安な日々を過ごした。鹿島神が叱責する鯰絵には、「地震よけのまじない・呪歌」が描かれていることもあり、明らかに地震よけの護符としての側面が見られるのである。また、鯰を打擲する図像には、鬱憤晴らしの意が込められている。このように、地震の張本人たる地震鯰が明確に「悪者」に描かれている鯰絵は、余震が続いている時期に好まれたと考えられる。

## 地震鯰が「善者」の鯰絵

さて、地震直後から始まった江戸の復興は、次第に本格化していく。瓦礫の撤去や土運びの為に多くの労働需要が生まれ、特に大工・左官などの職人層は引く手あまたとなり、普段の何倍もの高賃金を得て大いに潤った。彼らの儲けは、屋台店での飲食や仮宅などの遊廓でも浪費され、俄景気となった。一方、普段は儲けている富裕な商人は、家や蔵を失って大きな打撃を受けた。また富裕者

は地震・大火などの緊急時には「施行」という、被災者への施しが義務となっていた。これを風刺して、地震鯰が金持ちから黄金を吐き出させている鯰絵もある。富裕者の財産が貧しい者に施されて、復興景気も盛り上がっていくと、多くの人々が「安政地震は世直しである」と感じるようになった。すると鯰絵には劇的な変化が見られ、悪者扱いされていた地震鯰は、「世直し鯰」として描かれ、地震鯰を懲らしめていた鹿島神や要石は、鯰絵の中から姿を消す。ついには、地震鯰を「流行神」（一時的に人々の爆発的信仰を受ける、にわか神様）のように描いた鯰絵すら現われたのである。

## 鯰絵の終わり

このように鯰絵の図像は、安政地震の余震が収まり江戸が復興していく中、まさに百八十度変化した。江戸の人々は次々と出される鯰絵を見ることで「安政地震は世直しである」と感じ、震災のダメージから立直っていったと考えられる。一方で、俄景気を謳歌する人々に対して、地震で亡くなった者を思い起させたり、俄景気の終焉を暗示する鯰絵もあり、鯰絵の世界をより深いものとしている。

ところで、全ての鯰絵は、幕府の検閲を受けていない違反出版物であった。大部分の鯰絵は、普段は美人画・風景画などの錦絵（多色刷りの浮世絵版画）や草双紙などの軟派本を販売する、地本問屋と呼ばれる業者が作成していたと推定される。当初鯰絵の出版を大目に見ていた幕府も、安政地震発生から約2ヵ月後の12月15日、全ての鯰絵の版木を破棄させた。幕府は、鯰絵などの情報操作による、世論の更なる盛り上がりを危険視し、封じ込めてしまおうと考えたのだろう。

富沢達三／神奈川大学常民文化研究所特別研究員  
・歴史民俗資料学博士

# 大平安心伝

元禄十六年十二月廿二日  
 電光石火の如く地震あり  
 震動の如く地震あり  
 震動の如く地震あり

正保四年 寛文三年  
 天明三年 享和三年

弘化四年三月廿日信州大地震  
 弘化四年三月廿日信州大地震  
 弘化四年三月廿日信州大地震  
 弘化四年三月廿日信州大地震

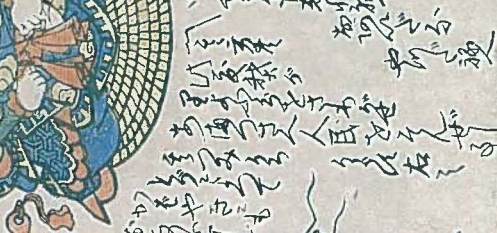
## 安政二年

安政二年十月二日  
 江戸大地震  
 安政二年十月二日  
 江戸大地震

## 拾遺拾遺

拾遺拾遺  
 拾遺拾遺

大平安心伝



諸職者

地震

革命

時代

直利

家茂

旋部

仁茂

要領

足理

優里

家茂

直利

革命

地震

諸職者

